

TAKAのシリア通信 08年6月号

Vol.3『胎動』

<目次>

- 1 What's your specialty? ～エンターテイナーになりたい～
 - 2 よく聞かれること ①何しに来たのだ ～ムシケラと言われて～
 - 3 よく聞かれること ②宗教はなんだ ～手品と無宗教と坂の上の雲～
 - 4 よく聞かれること ③今日は何をした ～腹と日常と壁～
 - 5 プロジェクトの行き詰まりを仮定する ～ピクニックとゴミのポイ捨てから～
- おまけコラム「アサド大統領のレバノン大統領暗殺疑惑」(へんりーの国際関係学講座より)

1 What's your specialty? ～エンターテイナーになりたい～

「What's your specialty?」

シリア第二の都市アレッポにあるアレッポ県保健局。そこは僕の配属先であるマンベジ郡保健局を統括している場所でもある。JICAから調整員Nさんとシリア人スタッフがやってきて、僕らを連れて県保健局へ行き、表敬訪問をした。そこで、自己紹介をしているときに、シリア人スタッフから言われたのが、「あなたの専門性は何ですか？説明してください。」という言葉だった。

「専門性」と言われ、戸惑った。自分に「何ができる」と言えるだろう。シリアサイドのプロジェクト統括者を前に、自分がここで活かせるものは、大学で学んできたことよりもむしろ、卒業してから開発コンサルタントの会社で何度も受けた開発学の講座だろうと思い、「大学では国際関係学を、特に国際法を学びました」と答えた後、「卒業後に開発学も学んでいます」と付け加えた。通訳も兼ねてやってきているシリア人スタッフが「いいね」と感想を述べてくれた。

困ったのはその後。プロジェクトが実施されている村へと赴いた時だ。再び「専門性は何か」と聞かれることになった。「開発学を学んだ」というのを、村において言うべきなのだろうか？僕が自己紹介をしているのは、この村に住むコミュニティ・ヘルス・ボランティア(CHV)達の前である。「あなたの村は遅れているから、僕が開発しにやってきたんですよ」なんて言う印象になりはしないかと、考えて、「彼らにとって、どんなリソースとなりうるのかを説明できればいいのではないか」という結論に達して、僕が選んだのが以下の3つである(その時は、こんなにしっかり説明できなかったのだが)。

①人を集める道具

②人をつなぐ道具

③知識・刺激となる道具

ひとつめの「人を集める道具」とは、自分自身が広告塔になることもあるけれど、**人を集める際のアイデアを提供したり、実施したりすること**。例えば、劇やお祭りの提案をしたり、絵や書道を使って人を集めて、そこから広報活動につなげていく、というような使い方をしてもらおう。

ふたつめの「人をつなぐ道具」とは、**住民やCHVの「したいコト」と「できるヒト」をつなぐ**、ということ。外部者として動き回るからこそ、手に入る情報を片っ端から集めて渡す。そうして活かせる機会を増やしていく。例えば、救急法を学びたいCHVに公共交通圏内で行なわれている救急法の訓練情報を渡したり、収入向上を望んでいる村の女性に手工芸の先生を紹介したり、といった使い方をしてもらえたら、と考えている。

みつつめの「知識・刺激となる道具」とは、ちょっとした工夫での生活状況の改善のアイデア提供(昔の日本にあった「生活改善普及員さん」のようなこと、例えば腰を痛めないように洗濯するための台を高くするだとか)だったり、CHV の個性や村の持ついいところに気付いてもらうようなしなかけ作りをしていく(いわゆるエンパワメント)といったことである。これをそのまま CHV や村の人たちに言うのはちょっと変な感じなので、「一緒に働き、考えたい」とだけ説明した。

しかし、以上の3つのことが「できます！」というためには、やらないといけないと思うことがある。5月号で挙げた「やりたいこと」とはそのことである。「住民の生活をよくするために、〇〇がしたい」のではなく、「**自分の生活をよくするために〇〇がしたい**」という住民の声に対して、**利用価値のあるリソースになるためにやりたいこと**、という視点だ。

そんなわけで、具体的に今やりたいことは、「**1に語学、2に引き出し、3に情報収集**」である。

何をやるにしても、語学は必須だ。そんなわけで、朝と寝る前に単語暗記をやったかどうかを表にして壁に貼って、「ちゃんとやれば自分へのご褒美に絵を買おうプロジェクト」を実施してる(やってみて思ったのが、「1日10単語覚える」といった結果ではなく、「早起きをしたかどうか」といった行動を評価し、視覚化しているのが効果的らしい)。そして、Study on the Roadも継続中である。さすがに疲れた日は休んでいるが、自己紹介はかなりスムーズになったし、お茶に呼ばれても、かなり話せるようになった(「何を言ってるのか理解できない」とか「こいつはアラビア語を話せないのか?」なんて言われて悔しい思いをすることも度々だが、凹んでいられない)。ちなみに、これには言葉を学びながら、シリア人たちの生活のことも聞けたりするので一石二鳥、いやプロジェクトの宣伝も出来て三鳥?の美味しい効果がある。

ついで、引き出しとは、「何かしたいな、って思った時に、さっと出てくるだけの奥の深さ」のこと。「**開発ワーカーはエンターテイナーでないといけない**」とは、たしか野田直人さん(『開発フィールドワーカー』著者)の言葉だったと思うけれど、その引き出し作りに励んでいるところである。筆ペンで名前を日本語で書くだけでもひとつのネタになるし、最近は似顔絵を描いて喜ばれたりもしている。そうした人集めの道具や話のきっかけ作りになるもの他、今後は意見を引き出し、アイデアを出し合えるようなワークショップ作りを出来る技術を身につけるようにしたい(社会人時代に開発学として勉強していたのがこれ)。

最後の情報収集の方法であるが、ひとつは専門家の人たちが行く先々に一緒にお供しながら、文化センターがやっている救急法や刺繍の訓練の情報を集めることであったり、ひとつは村を回りながら野菜の値段や仕事の様子を観察したり、実際に話しながら生活状況を聞いたり、ニーズを掘り出すといったことなどである。また、村の中で話している中で、「こんなことができるのか!」という人を発掘したりもする。加えて、僕自身も最低限の保健の知識がないと駄目だろう、と『Where There Is No Doctor(医者がいない場所で)』という無医村での保健指南書ともいえる英書を少しずつ読んでいたり、母子保健や栄養の本などにも目を通すようにしている。ある演劇で、「書を捨てよ、町へ出よ」という言葉を聞いたが、僕は「書を読め。そして町へ出よ」をやりたいと思う。

エンターテイナーであれ。これは、単に「面白くあれ」という意味ではなく、プロのエンターテイナーは笑いが取れないことを客のせいにはしないのと同様、プロの開発ワーカーは**実施したことがうまくいかないことを住民や文化のせいにはしない**、という意味でもある。専門性なんてかっこいいことは言えないかもしれないけれど、僕と言う存在が、役に立って、信頼できて、そして楽しいリソースになれるように、と考えながら毎日何かしながら生きている。やっтерことを書くと忙しそうだけれども、「努力してる」だなんて感じていない。やりたいことを、精一杯楽しんでいるだけだからだろう。なんとも幸せである。感謝。



(似顔絵を描きました)



(特技 消しゴムハンコ。使えるかな?) (買い物に行ったはずなのに座って話し込む)



(村で出くわす風景。シリアは人口と同じだけ羊がいる) (携帯を持っている人は田舎でも多い) (市場で働く少年)

2 よく聞かれること ①何しに来たのだ ～ムシケラと言われて～

SUZUKI という乗り物がある。別に車が TOYOTA であろうが、三菱であろうが、HYUNDAI であろうが、SUZUKI なのである。この SUZUKI、一見ただのトラックだが、荷台にイスが備えつけられており、乗り合いタクシーのような役割を果たしている。プロジェクトが展開している人口 400 人強、40 数世帯が住むナワジャという村には、家から徒歩で行くと 1.5 時間かかってしまうため、SUZUKI を使っていくと便利だ。だが、乗り合いタクシーだけに値段はバラバラ。行きは 75SP だったのに、帰りは 10SP の日もあれば、逆の日もある。

ある木曜日、そのナワジャ村でウェディングパーティーがあるという話を聞き、行くことにした。小さく保守的な村であることも手伝い、「まずは有力者(アラビア語で『ムフトール』)へ挨拶」をしなければならない。ナワジャ村の入口からムフトールの家まではずいぶんと遠いのだが(幹線道路に面した村の入口から徒歩 30 分弱!)、何はともあれ、ご挨拶に向かう。ムフトールやその家族も CHV であり、プロジェクトのことはよく知っているし、僕らも何回か会っている。会うなり、笑顔で応接室に歓迎してくれた。結婚式のことを聞くと「今日ではない」との説明を受けた。「じゃあ、いつなんだ?」と聞くと「明日…うーん、明後日…。そうだな、明後日」と、なんとも頼りない返事。結局 30 分近く、お茶を飲みながら歓談して、タイミングを見計って帰ろうとすると、農園へと連れて行ってってくれた。木に生ったあんずを貰い、頬張る。柔らかくて美味しい。見た所、ここで働いているのは、ムフトールの家族の女性達ばかりのようだ。ムフトールが機械を稼働させると、井戸水がすごい勢いで汲み上げられた。土に掘られた溝に沿って水が流れていく。溝からこぼれた水は、乾燥した土に吸収され

ですぐに姿を消していく。水の大切さを改めて感じる。しばらく、その農園で過ごしたあと、再び「帰ります」と切り出す。村の中ながら、どこが道かも分からないような道を通って帰っていくとき 2 人の子ども達が居た。道すがら話していると、お茶を一緒に飲もうと言ってくれた。ありがとうと礼を言い、子ども達に囲まれながら、お茶をご馳走になる。

この子ども達とどうやって遊ぼうかな、と考えて、今日は名前を覚えてみよう！と決めた。一人ひとりに名前を聞きながらアラビア語で書き、その横に日本語を書く。平仮名で書かれた名前を面白がってくれて、腕にも書いてくれ！という子どもも続出。名前を書きつつ、「彼がマトアブだね。この子は…ジャミーレ？」なんて言いながら、何度も間違える僕に笑いながら付き合ってくれる。僕から少し離れた場所で、女性達が井戸端会議のように話している。この日、大人の男性はあまりいないみたいで、帰る間際になって、子ども達の父親の羊飼いの男性と挨拶をただけだった。「明日も来てくれるよね？」と子ども達が言う。嬉しくて、「うん」と応えた。

その翌日になり、少し悩んだ。連日行くことに対して、ムフトゥールにまず会わないといけないうとなると「またお前か」ということになりはしないか。それに、イスラムの休日である金曜日だ。相手への迷惑かもしれないというのは勿論のこと、平日は毎日色々動いている僕の体力のことも気にかかる…。だが、朝ごはんを食べながら出した結論は「子ども達が待っている！」である。約束は守った方が良い(当たり前のことだが、つつい忘れがちになるのである)。語学を学んだ訓練所生活中に覚えたダブルダッチ(二重の大縄跳び)も出来たら良いな、と思い、首都のダマスカスで買った縄を持って外へと一歩踏み出した。家からSUZUKI乗り場に向かってしていると、大家さんが車に乗って登場。「どこへ行くんだ？」との質問に答えると「乗っていきな」と嬉しい言葉。車で行くと 5 分、だが歩くと 30 分近くかかる道のりを行き、「ここで待っていればナワジャに行けるから」ということまで教えてもらった(実は前日、乗り場が分からなくて町の人に聞きまくって結局見つからなかったのだ)。すぐにやってきたSUZUKIに乗ると昨日の帰りと同じ運転手だった。行き先を言う前に「今日もナワジャ村か？」と聞かれてうなづく。

村の入り口に着くと、村に向かう 50 代くらいのおじさんが一人。「アッサラームアライクム」と声をかけ、手を差し出す。握手こそ交わしてくれるものの、訝しげな顔をしたまま、「何しに行くんだ？」と聞いてくる。「小さな友達が残ってるもので」と笑うが、彼の厳しい表情は崩れない。道が分かれたので「それじゃあ」と納得できない顔をしたままのおじさんと別れた後、すぐに子ども達は寄ってきた。が、右手に見える家の軒先で、30 代くらいのおじさんと青年が座って手を振っている。礼儀を重視した方が良いだろうな、と挨拶すべく小走りにその家に駆け行って。「アッサラームアライクム」と握手した後、やはり「何しに来たんだ？」と聞かれて、たどたどしいアラビア語で説明をした。子ども達と約束したことと、シリアに来ている理由を。

「ムシケラだらけだな」。説明の後、彼は真顔で僕に言い放った。ムシケラ(مشكلة)とは、アラビア語で「問題」という意味である。僕のカバンの中をチェックし、辞書、水筒、縄を取り出しては、訳が分からないという顔をす。縄は縄跳び用だということをアピールするために跳んでみせた(あまりに独特なリズム感のシリアの子ども達相手では大縄はかなりの難関だった)が、何の弁解にもならなかったらしい。さきほどのおじさんも加わり、「ここに訳が分からん奴がいる」と紹介される始末(とはいえ、お茶は出してもらってたが)。ムフトゥールに電話をしていなかったことを思い出し、目の前で電話したが、大して効果なし。子ども達に「行こう」と誘われたので、おじさん達に「変な奴が来てしまって、ごめんなさい」と謝罪をしてその場を離れた。子ども達は、ナワジャ村を案内してくれた後、ムフトゥールの家にもついて来てもらい、事情説明を手伝ってくれた(その時わかったのだが、前日から仲良くなって、かつ村案内してくれた子は、例のおじさんのいとこだった)。帰り道、「ムシケラだ」と僕に言ったおじさんの姿は無かった。ムフトゥールや子ども達に「また来てね」と声をかけられて嬉しかった

が、問題扱いされたことのショックは消えない帰り道だった。

僕の職種は「村落開発普及員」である。何の仕事をしているのか聞かれたときは、「Village Developer(村を開発する者)」を直訳したアラビア語で説明している。でも、それって具体的にどんな仕事なんだと聞かれると、本当に戸惑う。今のところ、観察と情報収集だけで、「仕事」と言えそうなものは何もしていないし、先ほど説明したような「リソースとしての自分」と「仕事」とは少し違うと思う。「何でもやれるが、何もできない」というのが、自分の職種に対する認識で、そのことはすごく気に入っている。しかし、仕事を説明できないと言うのは何とも、もどかしいものである。自分の関わっているプロジェクトの説明をして、かつ医者でもない看護婦でもエンジニアでもないとなると不思議な顔をされる。

しかし、そんな僕に対して「よく来てくれたね」と言ってくれる人が多い、というのも事実だ。具体的な僕の仕事はよく分からなくても、僕という人間を気に入ってくれて、「また遊びにおいで」と満面の笑顔で言ってくれるおじさん達に囲まれる。僕がなぜここに来ているのか(つまりはプロジェクトについて)、新しく会話に加わったおじさんに得意そうに説明してくれる人もいる。

「お前は何しに来たのだ」。まだまだ曖昧な答えしか出来ない。けれど、一緒にお茶を飲んで、いっぱい話して、いっぱい笑って、色んなことを教え合って、信頼関係を築いていく。そうしていく中で、ちょっとはうまく言えるようになる気がする。何か動き出していく気がする。今は、スタートは、ムシケラであっても。



(HYUNDAI でも SUZUKI)



(名前を書いて、覚えよう計画)



(「腕に名前」は評判上々)



(村の中、こんな道を歩く)



(ポンプから水を撒く)



(結局、結婚式は翌週末でした(^^;)

3 よく聞かれること ②宗教はなんだ ~手品と無宗教と坂の上の雲~

広げられた布の上に、8本のスプーンを並べる。全てのスプーンに、レポート用紙を右回りに巻きつける。布でスプーンを覆う。手を布にかざし、コーランの一節を頭の中で捉える。布からスプーンを出すと、1本のスプーンだけ紙の巻き始めの位置が変わっている。日本人の僕らがやっても何も変わらない。「アッラーのカね」と、言って誇らしげな顔で僕を見る。事務所で一緒に働いている女性ディナのお姉さんが見せてくれた手品(?)

だ。

「俺はムスリムだ。お前の宗教は何だ？」と聞かれることが多々ある。「お前はムスリムか？」髭をたくわえた僕には、宗教を尋ねる前にそう言われることもある。そんな時は「まだ」と答えている。「ムスリムのことはわからないから、2年間しっかり知ってから考えようと思っている」と説明すると、そうかそうかと笑ってくれる(けれど、後で同僚の日本人に聞いたら、ある国ではムスリムからの改宗宣言をして、命を狙われたなんて話があるらしい。前後の状況もあるだろうから、その話をそのまま信じられるかどうかはともかく、文化を尊重する意味も込めて、簡単にムスリムになりたいとは言うべきではないだろうと思う)。

そんな風に、シリアに来てから「日本の宗教」を説明する機会があまりに多くなったので、『日本人はなぜ無宗教か』(阿満利磨、ちくま新書)という本をあわてて読んだ。概ね納得できる内容だったので、自分の宗教を説明する時は、その本からの情報を参考にした説明をしている。この本によると、日本の無宗教とは、「神を信じない」というわけではなく、「特定の宗派の信者ではない」ということのようなのである。また、文化庁発行の『宗教年鑑』によると、信者数は神道系1億600万人、仏教9600万人、キリスト教系200万人、その他1100万人、合計すると2億1500万人となる。人口の倍近い。つまり、家に神棚と仏壇がふたつあるように、**神道と仏教の両方の信者となっている日本人が多く居るのである**。詳細については、前述の新書に譲るが(ただし、ここに書いた説明に間違いがある場合は僕の責任です)、僕が語る日本の宗教観は以下のようなものである。

日本人は生きている時は「**伝統的宗教**」を信仰している。これは文化のようなもので、宗教と意識していないまま、毎日をどう生きるのか、あるいは年中行事として形を変えている。コーランのような聖典はない。年に何回か神社にお参りに行く。祖先を大事にするなどなど。

そして、**死後の幸福を祈るために仏教がある**(本の表現を借りると「葬式仏教」)。死後の幸福は、血の分けた者から祀られることで得られると考えられている(ただし、仏教は死者祭祀には興味が無かったらしい。中国に入った仏教が「孝」という価値を取り入れ、生前だけでなく、亡き親に孝を尽くすことの大切さを説き、善行のうちもっとも効果のあるのが死者のための仏に供養すること、とされた)。死をケガレとする日本の伝統宗教との役割分担というのもあるようだ。

また、歴史的な変遷もある。明治政府ができたとき、今までの幕府に代わる求心力を必要とするために持ち出したのが天皇を神とする「神道」だったが、幕末の不平等条約の改正の条件である「キリスト教の布教の自由」との兼ね合いが必要だった。その結果、宗教を「個人の私事」としてのみ認めることにした。つまり、心の中で唱えたり、宗教施設内でのみ**礼拝**を行なうことは認めるが、**布教活動**は秩序を乱すような社会的に目立つ行為であり、してはいけないというのである。そして、「神道は宗教ではなく、祖先を崇拝する**道**である」という説明で、事実上の神道の国教化を行なうと同時に、キリスト教の布教を禁止し、民衆支配に利用した。つまり、この時代、宗教は政治体制の維持との折り合いの中で存在することになった。だが、天皇を神とする時代は、第二次世界大戦の敗戦と共に幕を下ろす。元々持っていた宗教観に加え、天皇崇拝の軍国国家が犯したアジアでの殺人や神風攻撃に対する反省もあり、日本人の中に宗教を信じることに忌避感が強くなった。しかし、文化という形で日本では2つの宗教が共存している…。

語学力の都合上、もっと短い説明だが、大体このような説明である。一方、ここマンベジ地方では、住民のほとんどがイスラム教徒だ。日本人から見たら、生活のあらゆる場所に宗教が絡んでいるというのは息苦しさな気がしなくも無い。しかし、宗教という形をなしていないだけで、色んな宗教的な思想が僕らの生活の中にもあるのだろう。今読んでいる『坂の上の雲』(司馬遼太郎)は、明治の時代を描いているが、日本という「国家」を意識の中心にする自分達と比べ、上の世代が(江戸時代の)「藩」を中心に生きていることに感心するような場面があった。生きている場所と時代の特徴を、自然と受け入れながら、僕らは生活しているようだ。「当たり

前」とか「普通」とかって、実は普遍的でもなんでもないので。



(ゲストが男ならご飯は男だけで。女性は姿を見せない) (女性が買い物に行くことは少ない) (セルビス乗り場近くの墓地)

4 よく聞かれること ③今日は何をした ～腹と日常と壁～

初めて出会った人に、自分が何をしにシリアに来たのかを尋ねられるとき、「観光か、勉強か？」とまず言われる。健康についてのボランティアで、事務所は病院にある、と言うと「医者なのか？」と聞かれる。それも違うというと、「じゃあ、お前は何をしているんだ？」となる。その辺の悩みは、先ほど書いたのだが、今から書きたいのは「**普段、何をしているのか**」ということについて。

平日の午前中は、目安としては 9 時前後に動き出す。最近多いのは、「リプロダクティブヘルス強化プロジェクト」の日本人専門家の方々と一緒にどこかへ行くことだ。プロジェクトの評価が行なわれるのが今年の 11 月、来年の 3 月にはプロジェクトの専門家は居なくなるのだが、今は 2006 年から始まったプロジェクトが最終年度のために慌しく動いている。アレppo県マンベジ郡全体がプロジェクトの対象地域だが、マンベジ市は北部にある。そこを基点にし、点在する保健センターに訪れて様々なことを行なう。例えば、初年度から実施している保健センターのマネジメント強化のために書かれている書類の確認、保健センターで実施している健康講座の聴講、コミュニティヘルスボランティア(CHV)との顔合わせ、新規 CHV のトレーニング、地元有力者への挨拶、地元にある組織(青年会・女性連盟・教師連盟・文化センター)への挨拶などなど。専門家の人に予定を聞きつつ、同行できるようお願いして、マンベジ郡を動き回っている。

しかし、専門家の人たちが来る前は、家から徒歩数分の病院内にある事務所でアラビア語の勉強(プロジェクトで作られたマザーズカードや医療用語満載の書類などに向き合うこと)が多く、事務所に居るアルバイト(?)のアイハムやディナに辞書に載っていないアラビア語について、アラビア語で尋ねては唸っていた。今は、事務所に居ることは少ない。自力で南部の方も回れるようにセルビス(どこでも乗り降り可能な安価なバス)を探して、訪問したりもする。そうして、力を入れる活動地域・活動方法を考えながら、専門家の人たちが帰った後の活動を視野に入れ始めている。

そして平日の午後。午後といっても、ここシリアでは大体 2 時～3 時頃に昼食があるため(なので、シリアの晩御飯は 10 時くらいと遅い時間だ)、その後の時間の過ごし方について。大体、2 時には仕事を終了して家に帰って昼ご飯を作る。そして食べ終わるや否や昼寝をしたり(どおりで少し太ってきたわけだ)、アラビア語や保健についての勉強をしたり、活動の感想やデータを整理したり、買い物に行ったり、近くの雑貨屋さんや薬局でこっそりと話したりしている。知人の家や遠足に招待されることもある。2 時には「仕事」が終わってはいるのであ

るが、午後の過ごし方というのも「活動」に直結する。それは語学の習得や知識の補強、そしてシリアの生活を知ることにもなるからである。

そんな日常をもっとよくするための秘訣が、壁だ。僕の部屋の壁には紙がいっぱい貼ってある。アイデアを書き込む紙、アラビア語の単語、開発やビジネス本の言葉の抜粋、「引き出し」のネタ、したいことリスト、気付いたことリスト、週と月の目標を書いているもの、その反省を書く紙……。ぼーっとした時に壁を見ると、面白い。目に見えるので、アイデアが出てきたときに書くのも楽しい。「これ、やってないなあ」というのも、すぐに思い出せる。シリアの2年間は、きっとあつという間だ。楽しみながら、「壁」と向かい合いたい。



(病院内にある事務所の様子)



(有力者と専門家の会合に合い席)



(新規CHVTトレーニング見学)



(こういう文字を読んでいます)



(壁に貼られた紙たち)



(拡大図: アラビア語)

5 プロジェクトの行き詰まりを仮定する ～ピクニックとゴミのポイ捨てから～

マンベジには遺跡がある。カラートナジュム。「星の砦」という意味だ。公共の交通機関では行けない場所にあり、行くためにはヒッチハイクするか車を借り切るしかない。6月の晴れた土曜日、同期のシニア隊員 Y さんがダマスカスからマンベジに来てくれたので、マンベジに住む4人で車を借りて、カラートナジュムへ遠足にお連れした。僕ら自身も初めての場所だ。町の中心部から約40分、アサド湖のほど近くに、それはあった。湖のほとりにそびえる土色の城は、今でも雄大に見える。階段を登り、入り口を入ると回廊が続き、壁の隙間にある階段を登ると、辺りを見渡せる天井部へ。風の音だけが聞こえ、のどかで落ち着く場所だ。

もっとゆっくり見たいと思う気持ちをよそに、運転手と(なぜか一緒に来ている)その友人は僕らを急かした。実は彼らはアイハム(事務所でアルバイト中の大学生)の友人である。5月に一度、僕ら4人はアイハムと彼らと一緒にピクニックに行ったことがあり、今回もアイハムのツテで車を出してもらった(しっかり車代を払って)

るけれど)。30分足らずの滞在でカラートナジウムを後にし、彼らは車を湖に向けて走らせた。到着すると、彼らはおもむろに水着に着替えだす。「さあ、泳ごう！」水着を持ってないからと断っていたが、結局トランクス姿で入った。同期の女の子たちは入らずに、木陰で談笑をしていた(現地の女性は服のまま入ったりする)。誰のための遠足だろうか、という気もするけど、楽しかったし良いことにする。

が、一点。前回のピクニックでも気になったことが、やはり今回も気になった。彼らは平気でゴミをその辺りに捨てるのである。笑いながら僕の持っているゴミを奪い、その辺に捨てるので、「ダメだってば」と言いながら、それを拾ったこともある。ゴミを捨てるのは彼らだけではない。シリア中で放置されたゴミ、特にビニール袋がすぐ目に付く。なんとか、周りの人だけでも、と、ゴミをポイ捨てるのはよくないと言おうとするのだが、あまりにも皆がやっていて言いにくい。果たして、どうやって伝えたいのか。何回も同じことを言うだけでは駄目だろうし、僕が言って捨てないようになった人たちもいるが、それでは解決できていない。また、「どうして駄目なのか」ということを、僕が論理的に説明できないというのも事実なのである。こんなことを考えていたら、**自分が今、関わっているプロジェクトも同じような悩みを抱えているのではないだろうか、**ということに気付いた。

5月号でお伝えしたように、プロジェクトの柱の1つは「コミュニティヘルスボランティア(CHV)によるメッセージ伝達」である。しかし、僕が見たところ、それほど上手くいっているようには見えない。伝えるというだけであれば、小さな村なら特に、もっと浸透していいはずである。しかし、**メッセージはまだまだ伝わっていない。**なぜなのだろう。僕が仮定した理由は2つ。「メッセージが受け入れ難い(受け手の問題)」もしくは「CHVが活発に動いていない(送り手の問題)」である。

まずメッセージについてだが、CHVが伝えているメッセージは「産前健診4回・産後健診2回・出産間隔は3年」というものだ。健康診断はともかく、出産間隔3年間というのは結果的に子どもの数を抑制することにもつながりかねず、これがネックになっていると考えられる。**シリアでは、子どもは多い方が幸せだと考える文化的な理由があるが、更に子どもは労働力になるという経済的な理由もある。**10人子どもが居るとするのは決して珍しい話ではない(プロジェクトデータによるとシリア平均5.4人に対し、この地域では7.3人)。母体の健康を思えば、出産間隔は3年が望ましいのだが、毎年産むという話をよく耳にする。「それほど危険とは思えない」と考えていたり、それより優先する事由があるのであれば、当然メッセージは効果的に伝達しないだろう。今まで普通にゴミをポイ捨てしている習慣を変えるのであれば、相当に合理的で納得できる理由がない限りゴミを捨て続けるのと同じだ。文化と言われればどうしようもないが、経済的な理由であれば、折り合いを付けることは可能ではないだろうか。また、母子健康にとらわれずに、「健康」という幅広いテーマでメッセージを発信して、その中に出産についても織り交ぜて、納得しやすい筋道を作ると言うのも一つのアイデアになるかもしれない。

そして、CHVが活発に動いていないのでは、ということについてだが、僕が何度も「ゴミを捨てたらダメだよ」ということに対して疲れてきたのと同様に、CHVも**「変わらない習慣」に対してうんざりする部分があるのではないだろうか、**という推測ができる。同じメッセージを根気強く伝え続けるというのは非常にしんどいのである。そんな時に「頑張れ」とエールだけもらっても、いつか疲れ果ててしまうだろう。そこで、伝達そのものを目的にせず、その行為を楽しむための工夫みたいなものは考えられないだろうか。例えば、イベント作り。保健センターを中心にしたお祭りを企画して、そこで展示会や健康診断を行ったり、メッセージ性のある劇をしたり、そういう過程を楽しめそうな提案をしてみても良いかもしれない。

自分が感じたことというのも、活動のヒントになる。ただ、日本とは文化も違うのだし、そもそも同じ文化圏でも考え方なんて人それぞれだ。それをそのまま持ち込んでも効果は薄いだろう。こうした気付きを活かすためには、色々考えるべき点はある。しかしながら、一緒に活動する人も、僕らのプロジェクトで影響を受ける人

も、「プロジェクトのアクター」や「開発の対象」である前に、一人ひとりの人間である。知っているようで忘れがちなそのことを、ゴミのポイ捨てから改めて気付かせてもらった。この初心を忘れないで、これから始まっていくであろう具体的な活動に向かっていきたい。



(カラートナジムの風景たち)



(服のまま入る現地の家族)



(パンツで入る僕(一番右))



(ポイ捨てされたゴミ)

おまけコラム 「アサド大統領のレバノン大統領暗殺疑惑」(へんりーの国際関係学講座より)

「シリアのアサドが、俺らの愛するハリリ大統領を殺したんだ。」

シリアの南西の国レバノン。その第二の都市トリポリで、レバノン人が僕に言った言葉だ。

2005年の夏休み、僕はトルコからエジプトにかけて陸路で行く旅行をしていた。シリアもレバノンもその間に立ち寄った国だ。シリアから陸路でレバノンに渡った二日目、トリポリに僕は居た。まだ夜が明けて間もない頃に、泊まっている安宿を出て、街中を散歩に出る。カバン屋を通った時、そこで店番の男に話しかけられた。話が盛り上がり、腰を据えて話をし始めると、朝ごはんまで出してくれた。身内の子供を蹴っ飛ばすとか、かなり過激な人たちだったが、僕には優しくかった。「腕に、日本語で文字を書いてくれ」と頼まれ、彼らの名前や、「アッラー」と平仮名で書くと喜んでくれる。「Fuck my lifeと書いてくれ」とも言われたので、「人生なんてクソくらえ」と書いた。

ご飯を食べると、町の案内までしてくれると言う。レバノンの町並みは内戦の痕が生々しく残っていたのが印象的だった。トリポリツアーを終え、喫茶店で水煙草を吸う。僕がシリアから来て、今日の昼にはシリアに戻ることになるという、「何であんなクソツラな国に行くんだ」と語気を荒げた。彼は、僕の持っていたガイドブックに載っているシリアの子供の写真を見て、「物乞いだ。貧しい国だ」と罵った(実際は、レバノンには物乞いはいたが、当時のシリアには見当たらず、月収の低いシリアの方が生活状況は良かった)。

レバノンには、長くシリア軍の占領下にあったのも手伝ってか、シリア人嫌が多い(2005年2月のハリリ暗殺に対するシリア政府関与の疑惑を受けて、同年4月に駐留シリア軍は撤退した)。街の案内を終えた彼らと一緒に水タバコを吸っている時もそうだった。マンションのベランダから友人であろう男が、真上から挨拶してきた。すると、案内をしてくれた男たちは「奴はシリア人だ」といって、ベランダの男を「このゴキブリ野郎」と罵り、物を投げた。露骨な嫌い方だ。だが、彼らは話の輪の中に入って、普通につるんでいるのである。

中東は、ヨーロッパによる分断によって今もお政情が不安定とされる。シリアとレバノンも例外ではない。当地域はオスマントルコの支配下にあったが、第一次世界大戦後に独立したのも東の間で、英仏によって占領された。そこで、アラブ人の団結を恐れる英仏は、現在のシリア・レバノン・ヨルダン・イスラエルを分断し、不安定にしてヨーロッパへ侵攻する余裕をなくすようにした。フランスはシリア・レバノンを統治し、レバノンにはキリスト教徒を住ませた(現在も70%はキリスト教。但し民族はアラブ)。そして、英国統治下のヨルダン・イスラエルのうち、イスラエルにユダヤ人を入植させた。また、イスラエルを石油がない土地に限定して、欧州にとっての脅威になり過ぎないように配慮した。こうして、中東は現在のように政情不安定な地域となった。

シリアとレバノンの敵対もここから派生する。シリアとしては「もともとレバノンは自国の一部だったのにフランスの陰謀で分断された」という意識を持つことになった。その意識が、シリア軍のレバノン駐留を当然と考える素因となった(勿論、それ以外にも、イスラエルが絡んでくるレバノン内戦や、ゴラン高原を巡るシリアとイスラエルの敵対など、様々な要素が絡まっているのだろう)。

しかし、なぜハリリ元レバノン大統領は暗殺されなくてはならなかったのか。報道では疑惑ばかりが強調されて、その理由までは多く語られていない。国際政治ウォッチャーの田中宇によると「米政府の中からは、ハリリ暗殺事件の直後から、シリア政府の犯行であると断定する発言が相次いでおり、米マスコミでも、事件直後から『ハリリ暗殺で得をしたのはシリアだから、犯人はシリア政府に違いない』といった論調があふれ、ワシントンポストやニューヨークタイムスを筆頭に、全米の多くのマスコミが、シリアの犯行だと断定している」とある。

一方、疑惑のかかったバシヤール・アサド大統領とはどんな人物なのか。父親であるハフェズ・アサド前大統領が2000年に死に、世襲で大統領となった。父親は外交手腕に長けていたが、息子はそうではなかった。僕が出会った、あるシリア人の言葉を借りれば「今のアサドは、憲法を変えてまでして世襲したバカ息子だ」そうだ。眼科医を目指してロンドンに留学していたため、政治的手腕に乏しいのも仕方ないのかもしれない。だが、街中では彼の顔写真をよく目にする。ポスターは勿論だが、サングラス姿のシールが車に貼られているのを見ない日はなかった。乗用車のフロントガラスに貼られていた時すらあった。

あの写真がアサドとは知らなかった僕は、前述のシリア人とは別の男に「彼は誰なのか」と問うと、アサド大統領だと教えてくれた。そして、シリア人は彼のことを好きなのかと聞くと「そりゃそうだ。なんでかって？彼は、私たち国民を愛しているからさ」と言った。この言葉が本当かどうかは判らない。シリアでは彼の悪口を言っているのを街中にいる軍人に見つかれば、どんな目に遭うかわからないからだ。そもそも政治の話すらタブーである。僕は大変なことを聞いてしまっていた。

シリアのアサド大統領が、レバノンのハリリ大統領の暗殺に関与したのか、まだ国連の調査機関の答えは出ていない(※2008年6月現在も結論は出ていないようである)。しかし、この騒動によってシリアが不安定になれば誰が得するのか。事件の直後から騒いでいる米マスコミの姿勢に疑惑の目が向かざるを得ない。そして、米マスコミは政府の強い影響下にあることから、更にその背後には米政府が浮かんでくる。残念ながら、具体的な理由は、現状では解らない。中東民主化に都合がいいだとか、中東におけるイスラエルのプレゼンスを強化する為か、あるいは「文明の衝突」を行なう世界戦略の一貫か、予想は出来ても確実な根拠は不明である。しかし、政治的な要因が何かしらあるはずだ。中東は、絶えず政治的な戦略の中で揺らされてきたの

だから(※その後も相次ぐレバノンの反シリア政治家暗殺も含め、現在はイスラエル犯人説が有力のようだ)。

僕がシリアやレバノンを訪れた時、真夜中でも街を歩けるほどに治安が良かった。たとえ抑圧的な部分があっても、彼らの生活が不幸であるようには感じなかった。そんな彼らの生活が、大国の身勝手な都合で不安定にさせられるとすれば、滞在中に何度も現地の人に助けられた僕としては許しがたいことである。「そこに今、生きている人」に視点を向けることこそ、国際政治を考える上で大切なことであると、僕は強く思う。



(朝ごはんをもらう)



(町中に残されたままの銃)



(内戦で破壊された痕跡が残る)

(水タバコ→)

【参考文献】

田中宇「シリアの危機」『田中宇の国際ニュース解説』

(<http://tanakanews.com/f1015syria.htm>)

「バッシュール・アル＝アサド」『ウィキペディア (Wikipedia)』

以上は、昔書いていたブログ「へんりーの国際関係学講座」から『へんりのシリア・レバノン戦記「アサド大統領のハリリ暗殺疑惑」』

(<http://plaza.rakuten.co.jp/henkoku/diary/200601250000/>)を、表現に関して加筆したものです。内容に関しては、2006年1月の執筆当時と政治状況や僕の知識・認識は異なるのですが、ほぼそのままにしています。



〈蛇足の後書き〉 昔書いた政治の話を書かせてみました。これを機に、改めて色々と政治の記事をネットで探して読んでみたんですけど、かなり複雑で、結局、内容に関してほとんど加筆をできず、申し訳ありませんでした。そして、調べているときに感じたのが、「日本で目に入るシリアに関する情報を読んでいると、『シリアって危険な国』って思われるのも仕方ない」ということでした。でも、実際に住むシリアは、怖いニュースで溢れている今の日本よりも安全じゃないか、というくらいなんです。



堅い話が多い『TAKAのシリア通信』ではありますが、拙稿を通して、シリアを身近に感じて、「行ってみたい国」になってもらえればすごく嬉しいです☆大好きなシリアの友人達に、是非、会いに来て下さい♪

ではまた、7月号で
お会いしましょう☆

(文責・写真: 中野 貴行)

nakatoka18aug@gmail.com

※転載・転送をご希望の際は、ご一報くだされば大歓迎です